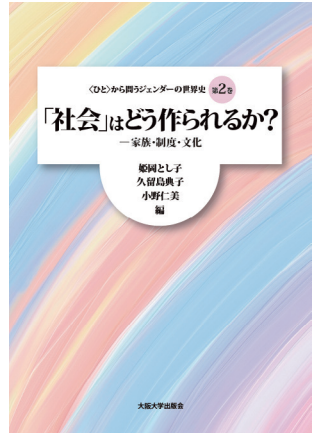


第1巻 2023年12月 刊行予定



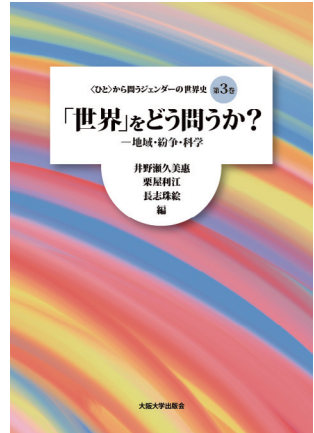
- 第1章 身体と「ひと」
- 第2章 生殖と生命
- 第3章 セクシュアリティと性愛
- 第4章 身体管理と身体表現
- 第5章 性暴力と性売買

第2巻 2023年9月 刊行予定



- 第1章 家・家族・親族
- 第2章 社会的ヒエラルキーとジェンダー
- 第3章 権力・政治体制とジェンダー
- 第4章 労働・教育・文化

第3巻 2023年12月 刊行予定



- 第1章 創られる「世界」と「地域」
- 第2章 世界の創造と再創造  
—植民地主義とグローバル化
- 第3章 戦争と暴力に抵抗する
- 第4章 地球環境の変化  
—気候変動・災害・疫病
- 第5章 科学とジェンダー

### シリーズ企画趣旨

◆なぜ、「ひと」から問うジェンダーの世界史か？ 2014～15年、わたしたち比較ジェンダー史研究会のメンバーは、ジェンダー視点から高校世界史と高校日本史の記述を書き換えるという意欲をもって、『歴史を読み替える』（2巻本）を上梓した。『ひと』から問うジェンダーの世界史』（3巻本）は、その後継である。しかし、本書は、『歴史を読み替える』を上回る特徴を持つ。それは、三つの問いを立て、それらの問いを各巻のタイトルと構成にはっきりと反映させたことである。「ひと」に女性が含まれない歴史は「歴史」とは言えない—これがわたしたちの原点である。

章構成にあたっては、アジア・アフリカ・イスラーム圏などを重視し、欧米中心にならないように配慮した。テーマごとに最もふさわしい事例や日本の「世界史」の常識を覆すような事例を選んだため、時代・地域に必ずしも統一性はない。しかし、できるだけ比較ジェンダー史として有益な章・節・項・コラムになるよう工夫をこらした。比較ジェンダー史研究会WEBサイトとの連携もはかっている。読者のみなさんが本書を気軽に手に取って「なぜ？」と身の回りを振り返り、本書が「あたりまえ」を問い直すきっかけとなってくれることを心から願っている。

(第2巻「はしがき」より)

申込書欄 ○ご注文は本申込書にご記入の上、お近くの書店にてお申し込みください。

○小会に直接ご注文いただくことも可能です。下記連絡先までお申込みください。

### <ひと> から問うジェンダーの世界史 [全3巻]

- ①「ひと」とはだれか？  
—身体・セクシュアリティ・暴力 ISBN 978-4-87259-777-6
- ②「社会」はどう作られるか？  
—家族・制度・文化 ISBN 978-4-87259-778-3
- ③「世界」をどう問うか？  
—地域・紛争・科学 ISBN 978-4-87259-779-0

お名前 \_\_\_\_\_ TEL \_\_\_\_\_

ご住所 〒 \_\_\_\_\_

2023年9月より順次刊行  
A5判・並製・各巻約300頁  
定価 各2,400円+税10%  
メールご注文フォーム→



書店番線印

### 大阪大学出版会

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-7  
大阪大学ウエストフロント  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617  
e-mail eigyo@osaka-up.or.jp

# ひと

# 社会

# 世界

## <ひと> から問う ジェンダーの世界史

全3巻 | 2023年9月 刊行開始

- ①「ひと」とはだれか？
- ②「社会」はどう作られるか？
- ③「世界」をどう問うか？

### あの時代はジェンダー視点だとうこう読める！

第1巻

## 「ひと」とはだれか？

身体・セクシュアリティ・暴力  
【編】

三成美保  
小浜正子  
鈴木則子

第2巻

## 「社会」はどう作られるか？

家族・制度・文化  
【編】

姫岡とし子  
久留島典子  
小野仁美

第3巻

## 「世界」をどう問うか？

地域・紛争・科学  
【編】

井野瀬久美恵  
栗屋利江  
長志珠絵

大阪大学出版会

ジェンダー視点から見直すと、世界史はこんなに違って見える。歴史の新常識をコンパクトに解説。

# 女性が含まれない歴史は

【目次】  
総論 「いつ」から「世界史」を問うことの意義  
第一章 身体「いつ」  
二 概論 身体「いつ」（人権性）  
三 伝統社会における多様な「男らしさ」（男性性）  
四 近代国家の市民権と男性性  
五 さまざまな「しじさ」  
六 「いつ」の分類・差異化・権利保障

全時代・地域を網羅する約280個のテーマ（コラム含む）を解説

第一章 生殖と生命  
一 概論 生殖と生命  
二 「産むべき身体」と「生まれるべき生命」  
三 リプロダクティブ・ライツ  
四 生殖革命と生殖補助医療  
五 人口と家族  
第二章 セクシュアリティと性愛  
一 概論 性をめぐる規範・秩序はどう変化したか？  
二 セクシュアリティと性愛・結婚  
三 LGBT・SOGI  
四 歴史の中の「性の多様性」  
五 男性同性愛と政治  
第三章 身体管理と身体表現  
一 概論 身体管理と身体表現  
二 「病い」の「障がい」  
三 服飾と化粧  
四 身体描写と身体表現  
第五章 性暴力と性売買  
一 概論 性暴力と性売買  
二 性暴力の歴史―「差支度」から「MeToo」へ  
三 買売春

【目次】  
総論 社会の構成原理としてのジェンダー  
第一章 家・家族・親族  
一 概論 家・家族・親族  
二 家族・親族と前近代（伝統）社会  
三 公私のあり方と近代家族  
四 「比喩」家族構成員のあり方  
五 家族法と社会  
六 女性の相続・財産権  
第二章 社会的ヒエラルキーとジェンダー  
一 概論 社会的ヒエラルキーとジェンダー  
二 身分制とジェンダー  
三 空間のジェンダー配置  
四 宗教・信仰とジェンダー  
五 近代社会の統合と排除  
第三章 権力・政治体制とジェンダー  
一 概論 権力・政治体制とジェンダー  
二 王権とジェンダー  
三 政治体制とジェンダー  
第四章 労働・教育・文化  
一 概論 労働・教育・文化  
二 労働  
三 教育と職業  
四 文化とメディア

【目次】  
総論  
第一章 創られる「世界」と「地域」  
一 概論 創られる「世界」と「地域」  
二 地域の認識と語られる「世界史」  
三 地域をつなぐヒトとモノ  
第二章 植民地主義とグローバル化  
一 概論 植民地主義とグローバル化  
二 植民地化による地域・社会の再編成  
三 冷戦とポストコロニアル状況  
四 グローバル資本主義と女性労働  
第三章 戦争と暴力に抵抗する  
一 概論 戦争と暴力に抵抗する  
二 内戦とテロリズム・ハイト  
三 異議申し立てのさまざまな形（一）  
四 異議申し立てのさまざまな形（二）  
五 ジェンダー主流化に向けて  
第四章 環境・災害・疫病  
一 概論 日常が壊れたときに  
二 環境破壊  
三 核とジェンダー  
四 ジェンダー  
第五章 科学とジェンダー  
一 概論 科学とジェンダー  
二 ジェンダー秩序と研究・教育  
三 ジェンダー・ステレオタイプとテクノロジー

※内容は変更になる可能性があります

3) 政治体制とジェンダー

## ②ナチズムとジェンダー



📖 I-1-6-②、I-2-3-②、II-2-5-② 🔍 読 世13-10

◆**ナチ党の女性政策と家族・母性** 当初、ナチ党は男性結社を自認し、選挙でのナチ党投票者も男性が多数を占めていた。女性は黨員にはなれたが、幹部や議員にはなれず、政治、経済、軍事など社会を動かすのは男性で、女性の役割は出産と「健全な子ども」の養育だとされた。女性を「二流の性」として蔑視したヒトラーも母性は礼賛し、『わが闘争』（1925、27年）に、「母親はもっとも重要な公民」と記している。権力獲得が現実味を帯びると、ナチ党は女性票を意識して家族や宗教を擁護する姿勢を示した。また彼らは、「女性の使命」を軽視する風潮に終止符をうつと誓ったため、「ヴァイマル時代の女性解放」による家庭という「女性の世界」の価値の低下を憂っていた多くの女性に安心感と期待を与えて支持を得た。

ナチ体制下では、男性の失業対策もかねて、苦勞して進出した専門職からの女性排除の政策が取られた。官吏では上級職と中・低級職を含めた既婚女性の解雇、法曹界からの追放、高等学校勤務の女性教師の初等教育レベルへの配置転換、女性医師の保健指定医からの排除、女子学生比率を大学入学定員の10%に制限など。他方で母性にはさまざまな保護・報奨制度を設け、妻の非就業を条件に結婚貸与金が支給されて、子どもを1人産むごとに返済額の4分の1が免除された。「母の日」は国民的祝祭となり、この日に4人以上出産した母親には十字勲章が授与された。

◆**生殖の国家管理** 1970年代にフェミニズム運動は「産む産まないは女性が決める」というスローガンを掲げたが、ナチはそれとは真逆の「産ます産ませないは国家が決める」という政策を推進した。ユダヤ人、黒人、シンティ・ロマはドイツ民族との結婚を禁止され、後に強制収容所に送られた。身体・精神的障害者、アルコール中毒患者、生活保護受給者などの「価値のない生命」は強制的に断種され、ドイツ国内だけで22万人弱が安楽死させられた。「価値のある生命」に対しては避妊具取得を困難にし、中絶の罰則を強化した。子どもができない夫婦の離婚の容認、一夫多妻を実践させて生まれた親衛隊員の子どもの国家施設での養育など、人口増加のためには市民的家族規範の崩壊も辞さなかった。

◆**女性組織** ヴァイマル時代の女性組織は、暴力的に弾圧されるか（社会主義

### ▶参考文献

桑原ヒサ子（2020）「ナチス機関誌「女性展望」を読む―女性表象、日常生活、戦時動員」

# 歴史とは言えない

参考文献リストや補足資料も充実、発展的学習の道しるべに